

小栗上野介情報78

ホームページ<http://tozenji.cside.com/> Eメール: tozenji@clock.ocn.ne.jp



2021(令和3年) 1 月
発行:東善寺 住職 村上泰賢
群馬県高崎市倉渕町権田169
〒370-3401 Tel・fax:027-378-2230
〒振替00120-1-406206東善寺

【小栗上野介の言葉】

栗本鋤雲、島田三郎、渋沢栄一が伝えた…

「幕府の運命に限りがあるとも、 日本の運命には限りがない」

—幕府は終わっても、日本は続く(そのための土蔵＝横須賀造船所)— と語った小栗上野介

「土蔵付売家」

じょうん
栗本鋤雲は小栗の言葉をこう伝える

幕府で造船所建設がほぼ決まりかけた頃「横須賀造船所が出来上がれば、いずれ「土蔵付き売家」の栄誉が残せるよ」と栗本鋤雲に語った(栗本鋤雲『匏庵遺稿』)

この言葉は小栗上野介の言葉として早くから知られている。

しかし、「これは早くに殺された小栗を悼んだ小栗の盟友栗本鋤雲の創作だろう」「小栗に幕府解散の4年前にそれを予見する先見性はないだろう」とする学者や作家もいる。

だが、同じ趣旨の言葉で、右記の島田三郎の談話証言「土蔵付き売据え」には臨場感があり、併せて読むと、この頃の小栗上野介の心情が痛いほどよく理解できる。真の武士の言葉といえよう。



▲島田三郎(国立国会図書館蔵)

「土蔵付き売据え」

「売据え」…家具調度品付きで家売る。居抜き

島田三郎は小栗上野介の言葉をこう伝える

幕末にある幕臣が「幕府の運命もなかなかむづかしい。これから費用をかけて横須賀造船所を造っても出来上る時分には幕府はどうなっているかわからない」と言ったのに対し、小栗上野介は居ずまいを正し、「**幕府の運命に限りがあるとも、日本の運命に限りはない**」と言い、「私は幕府の臣であるから幕府のためにつくす身分ではあるけれども、結局それは日本の為であって、幕府のしたことが長く日本のためとなって徳川のした仕事が成功したのだと後に言われれば、徳川家の名誉ではないか。国の利益ではないか。**同じ売り据え(売家)にしても土蔵付売据の方がよい**。あとは野となれ山となれと言って退散するのはよろしくない」と語った。

(島田三郎「懷舊談」『同方会報告』明治29年6月第1号)

◆この言葉のやり取りから推測できること

- 1、幕末期には、徳川幕府の国家経営はすでに組織と運営が行き詰まり、欧米への開国による新しい国家経営戦略を展開しようにも幕府の政治体制に限界があって、このまま長続きさせることはできない、という共通認識が幕臣の間にあった。
- 2、そういう認識のもとに、「〇年後には幕府がどうなっているか分からない」といった会話が普通に交わされ、それを「不忠である」と非難する雰囲気になかったこと。幕府を絶対に存続させるという認識ではなかった、状況がうかがえる。
- 3、この言葉の背景に、「いずれ政権交代はある」とする、その時の政治権力を絶対視しない儒学・陽明学がある。

「幕府の運命について覚悟を一」

渋沢栄一は小栗上野介の言葉をこう伝える

『青淵先生(渋沢栄一)演説及談話』より(意訳)

【渋沢栄一は慶応三年徳川昭武に随行してパリ万博へ出かける前、横浜で勘定奉行小栗上野介に会い、会計係として挨拶した】

渋沢「今度民部様(昭武)御渡仏の会計俗事係の渋沢篤太夫でございます。民部様はフランス大博覧会に御列席が済むと約五年留学の予定です。その間の会計を心配しております。よろしく御指導御高配を…」

小栗「いやご丁寧なご挨拶で恐縮です。それにしても貴殿は幕府の五年も後のことを心配する柄ではないでしょう。貴殿は討幕を企てた程の男、そんなことを心配するのはおかしい」

突然で流石の渋沢も面食らったが、何食わぬ顔で

渋沢「しかし、それは昔の話でございます」

小栗「昔と言っても、まだ1年か2年しか経っていないではないか…」

鋭鋒は隙すか さず迫る。

渋沢「…ではございますが、今はそのようなことは考えて居りません」

どこまでも渋沢が生真面目でいるので小栗も追及の鋒をおさめた。

小栗「まあこれは冗談だ。とにかくこのたびの民部様渡仏はけっこうなことで、自分も心から喜んでいる。貴殿の事も承知している。貴殿のように志の高い人物が民部公を補佐してくれることは喜ばしいことだ。どうか十分に働いてくれるよう期待している。会計については五年どころか三年先、二年先のことも全く分らない。(自分)病

気で倒れるか、身を退くかすれば分らないが、いやしくも自分が職に在る間は決して心配はかけぬから安心して行くがよい。しかし、呉々も幕府がいつどうになるかは全然分らぬから一此点は敢て小栗が斯く憂慮するばかりでなく、皆人の齊ひとしく感ずる所であるが一或は生きて再びお元気な民部様に対面できないかもしれないが、その時はその時のこと。決して心配することはいらぬ。然し**幕府の運命に付ての覚悟**だけはしっかりきめて置くことが必要であろう…」

こうしてお別れしたが、小栗のこの言葉は悲しくも事実となり悲惨極まる末路を見たのであった…。

(昭和5年3月7日 飛鳥山邸に病後の子爵を訪ひ閑談中に聞き得たる所を一白石喜太郎憶記一)

*——線部は裏のページへ——



深谷駅前
の渋沢栄一像

表ページよりー

渋沢栄一の討幕計画

「貴殿は討幕を企てた程の男」「貴殿の事も承知している」…とは

討幕運動

渋沢栄一は20代のころ水戸学に傾倒し尾高惇忠、渋沢喜作ら同志70名で高崎城を乗っ取り、横浜の異人館焼討ちの討幕計画を立てたが、1863文久三年十一月の決行前日、京都から戻った惇忠の弟長七郎の反対で中止。すでに大量の武器を集めていたから露見を恐れ郷里を出奔して京都へ行き、知遇を得ていた平岡円四郎のつてで一橋家に仕官する。名を農民風の栄一から武士風の篤太夫に改め働くうち才能を見込まれ、昭武の渡仏に随行することになった。小栗はそういう渋沢の素性を知っていた。そして「貴殿のことも承知(＝まだ執行猶予中だぞ、しっかりやれよ)」とクギを刺したことになる。「この時小栗にはねられていたら、1万円札の渋沢はあり得なかった…」と深谷市民S氏は語る。

小栗の構想を実現させた渋沢栄一

このとき、小栗は渋沢という人物を見抜いて遣米使節渡米の見聞を語り、フランス・ヨーロッパで見るべきもの、学ぶべきことがらを示唆したと思われるが、二人の間で具体的に何が語られたか、残念ながらそこまでは記録されていない。しかし、北区飛鳥山の渋沢史料館に入ると小栗が意図構想した日本近代化をのちに実現させたのが渋沢、という構図が見えてくる。

情報あれこれ

小栗上野介顕彰会は高崎市長から

高崎市文化財保護表彰を受賞

小栗上野介顕彰会は高崎市文化財保護表彰を受けることとなり、11月27日(金)午前、市川平治会長、企画委員長伊井光也、編集委員長村上泰賢が参列。顕彰会名誉会長でもある富岡賢治市長から表彰状を受けた。その後の市長との懇談で、市長から「小栗上野介の動画を作ろう」という提案があり、市で取り組むことになった。

報告法要 152年前の道子夫人の会津脱出護衛以来、多くの先人の努力があつての受賞として、12月12日(土)、墓前で報告法要を行った。



『小栗かるた』制作を決定

小栗上野介顕彰会は『小栗かるた』を制作することを検討、具体的な募集要項などの検討を進めています。

○「読み札」の公募 いろいろな角度からみて小栗かるたに応募してください。

- ・応募は 小学生～大人までどなたでも
- ・募集期間は 令和3年6月30日締め切り
- ・ハガキに 住所、氏名フリガナ、電話番号、学生は学校○学年、読み札の案(ハガキ一枚に1案)、その解説(できるだけ)を書いて

- ・送り先 倉渕支所内 小栗上野介顕彰会
370-3492 高崎市倉渕町三ノ倉303
027-378-4522

○「絵札」 読み札を決定後に、絵札の制作に入ります。推薦する画家がいましたら、小栗上野介顕彰会宛にお知らせください。

本

『音吉伝』

新葉館出版 篠田泰之著 2860円
世界に日本型民主主義を示した初の国際人、ジョン・M・オトソンこと山本音吉は、一漂流民からモリソン号事件を経て、幕末の救世主となった。外国に生活の拠点を築けたため終生果たせなかった帰国への夢を、他の漂流日本人の帰国をサポートすることで果たし

『日本を開国させた男、松平忠固ただかた』

作品社 関良基著 2200円
信州・上田藩主。海外の情勢をよく認識し、数度の飢饉に領民救恤きゅうじゅつを尽くし、養蚕による殖産を指導。老中となって開国・交易を推進し、繭・絹織物の輸出の基盤を築いたが小栗公の遣米使節出発の前年に48歳で病没。

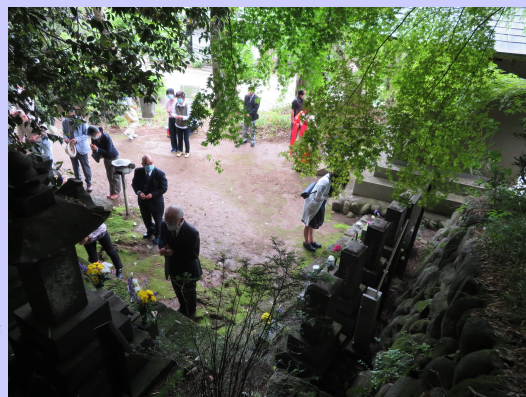
◆小栗まつり

墓前祭のみ

5月24日(日)

非命153回忌小栗まつりは世界的な新型コロナウィルス感染防止の見地から中止とし、当日は墓前祭のみとして住職が読経、参列者が献香を行なった。

慶応四年閏四月六日、七日に殺害された小栗父子主従と殉難の村人らの供養はその年から村人によって始まり、以後戦中も絶えることなく続けられてきた。今年はその原点に戻ったように静かな、心のこもった墓参風景であった。



◆『たつなみ』 45号 発行

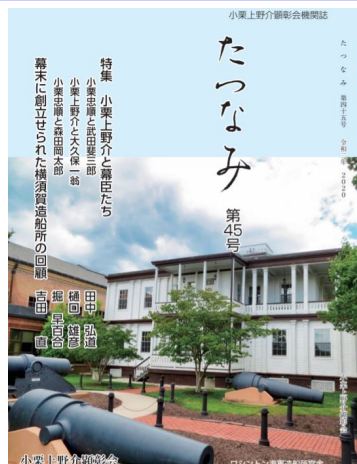
小栗上野介顕彰会は機関誌『たつなみ』45号を発行しました。

◆特集：小栗上野介と幕臣たち
小栗上野介と武田斐三郎・大久保一翁・森田岡太郎

横須賀造船所の回顧

詳しくはHP東善寺>小栗上野介>関連書籍 で御覧ください。

◆購入希望は倉渕支所又は東善寺へ



◆「小栗清水」を草刈り作業



小栗上野介顕彰会

中之条町六合地区で、小栗道子夫人が逃れる途中に飲んだとして大事に保存されている「小栗清水」周辺とコースの草刈り作業を、地元山田正人氏のご支援を得て行った。参加 市川平治、塚越昇、伊井光也、村上泰賢、高橋好学、深谷祐太

◆下斉田で改築の阿弥陀堂と小栗又一墓参拝

9月15日

小栗家養子の又一主従が埋葬された下斉田町(高崎市)墓地の阿弥陀堂が再建された。小栗上野介顕彰会市川平治、深井紘、伊井光也、村上泰賢はお祝いと墓参に行き、下斉田支部の皆さんと交流を深めた。

